

医学図書館員の教育 Education for Medical Librarians

津 田 良 成
Yoshinari Tsuda

Résumé

From the old days, a librarian has been expected to have some knowledge of the subject his library aims to cover, and of one or two foreign languages, besides his knowledge of library science.

It is not quite unusual today for someone with some natural science background and library science education to seek a job at a medical library. However, it would be yet an exceptional case, if a medical doctor becomes a professional librarian. Accordingly, a course of elementary knowledge in medical science and its terminology is necessary for education of medical librarians.

About 60 per cent of the books and journals in medical libraries in Japan are in foreign languages. And English is predominant as an international language in the medical science fields.

Besides the knowledge of general library science a medical librarian is expected to have additional knowledge of medical library administration and of medical bibliography.

Because of the development of MEDLARS, medical libraries in the United States became more active in literature search and other information services. And the Knowledge relating to these activities is getting to be another necessary requirement for medical librarians.

In Japan, a nation wide network of interlibrary loan service among medical libraries has been well established by the effort of the Japan Medical Library Association. However, but when it comes to information service, even though the International Medical Information Center, Inc. (IMIC) is handling more than 700 manual search requests a year, and the Japan Information Center for Science and Technology (JICST) began its service as a MEDLARS search center for this country from June 1972, no systematic (nation wide) service exists.

Computer applications in various medical information activities are being developed rapidly,

津田良成：慶応義塾大学図書館情報学科教授兼財団法人国際医学情報センター業務担当理事。

Yoshinari Tsuda, Professor, School of Library and Information Science, Keio University and Managing Director, International Medical Information Center, Inc.

but the Japanese medical librarians are left behind of this development. In the United States, as it was shown in the effort of the Curriculum Committee of the Special Interest Group/Education for Information Science of the American Society for Information Science in determining the core curriculum of education for librarians and information specialists, the need for more advanced information services which require the knowledge of behavior science, computer science, system theory, mathematics, linguistics and traditional library and information science is fully realized.

The IMIC is providing the scientists and other workers in the field of health science with various information services, such as retrospective and current awareness literature search, translation, indexing, abstracting and other similar activities. The core of the knowledge needed for the staff of the IMIC are elementary knowledge of health science and its terminology, and English, in addition to the basic theory of library and information science. The skill and knowledge of literature search technology is also required for the people who work at the various sections of the Literature Information Service Division of the IMIC.

Among other knowledge and skills considered necessary for the Center's staff, elementary of system theory and of computer science are regarded as more important ones.

At the moment, in Japan, no library school is teaching any special course for medical librarians, but the course is necessary if medical libraries are expected to serve their clients satisfactorily in the new field of information service.

In the United States, in 1968, there were already 17 library schools offering some specialized courses for education of medical librarians. These courses can be classified into three groups; those designed to provide a general introduction to medical librarianship, those devoted primarily to medical bibliography, and those developed to provide instruction in depth in specialized aspects of medical librarianship.

The School of Library and Information Science of Keio University at the moment does not provide any specialized course for education of medical librarians. When we think about the fact that more than one fifth of their graduates work at medical libraries, it would be desirable for the school to establish such courses for medical librarians as those presently given by some of the American library schools.

I. 医学図書館員に必要な知識

1. 従来から求められている知識
2. 最近の傾向
3. 国際医学情報センターとして職員に求める知識と技術

II. 医学図書館員のための教育活動とそれに対する要求

1. 正規教育における医学図書館員の教育
2. 図書館学の正規教育機関に対する要求

I. 医学図書館員に必要な知識

1. 従来から求められている知識

一般に医学なり、化学なり、工学なりの分野に働く専門図書館員は、昔から次の3つの知識を出来るだけ充分に持っていることを求められてきた。すなわち、①図書館学と②語学と③主題についての知識である。もちろん、この3者は、専門図書館員のみにとって必要な知識というものではなく、すべての図書館員にとっても望まれることであるが、③の主題の知識についての必要は特に自然科学系の専門図書館において、より強く求められている。

ドキュメンテーションとか、インフォメーションサイエンスと呼ばれる活動が自然科学の分野で発展したのは、この分野での情報サービスに対する要求が強く、主題内容には余り立ち入らないで、図書・資料の提供サービスに片寄っている従来の図書館サービスでは、利用者の必要に充分に応えられなくなってきたからである。

主題の知識を多く、且つ深く持っていることは非常に望ましいことであり、現に化学、生物学、薬学などを大学などで専攻した人達が図書館学を学んで自然科学分野の専門図書館員になるということはアメリカではしばしばあることであり、わが国においても最近ではさほどめづらしいことではなくなってきた。しかしながら、医学を学んだ人が医学図書館員として働くことはまだ例外的な出来事であり、医学図書館の場合には、生物学であるとか、有機化学、薬学などの知識を持つ職員を手に入れることができれば幸運であると考えられる。

雑誌を編集出版したり、抄録誌を出したりする他には、医師が直接図書館サービスや、医学情報サービスに積極的に参加していない理由としては、次のようなことが考えられ得る。

- ①医学情報活動の重要性に対する医師の認識の不足。
- ②医師の絶対数が不足しているため、医学情報活動にまで手が廻らない。
- ③図書館員や、情報活動従事者の社会的地位が低過ぎ、又収入も少な過ぎるのに比して、医師は一般に社会的地位を高く評価されている上、収入も多い。従って、情報サービスに従事する医師というものが現われてこない。
- ④医師は企業などで働くものが少ないため、情報の必要性を非常に強く感じるものが少ないか、またはあってもこれを組織的に扱っていくのに必要な金額を

投資する機関がない。その責任があるものとしては厚生省、文部省などが考えられるが、わが国の場合、最近まで学術・技術情報の重要性についての関係政府機関の認識は充分とは言えなかった。

以上の理由で医師の組織的情報活動への参加というものはほとんど見られなかった。

しかし、学問・技術の急速な発展と、それにとりもなう情報量の増加は、従来からの図書・雑誌などの文献を利用者の求めに応じて提供できればよいとする図書館サービスの形を時代遅れのものとしてしまい、文献についての情報の提供はもとより、文献の中に含まれた情報そのものの提供までが、当然のサービスとして求められるようになりだしてきている。ところが情報そのものの提供を満足に行なうには、その主題分野の専門知識を持っている要員を使用しなくては無理である。しかし医学分野の情報サービス活動に医師が直接参加していない現状では、図書館員や情報センターの職員に医学に関する初歩的な知識を習得させて、それらの職員のできる範囲での情報の処理を行なうといった程度で我慢しなければならない。その場合、医学用語についての理解が最も大切なものとなる。そしてその理解には、化学なり、生物学なりといった自然科学分野を専攻していることは、大きな助けとなることは確かである。

現在の医学分野で最も広く使用されている言語は英語であり、かつてのドイツ語一辺倒の状況は完全に消失してしまっている。しかし戦前の文献を必要とするときは、ドイツ語の文献を無視することはできないし、またフランス語、イタリア語、ロシア語などの雑誌も、医学図書館ではさして珍しいものではない。しかも、わが国の大学に属する医学図書館の場合には、通常その蔵書の約60%が外国語の図書や雑誌で占められている。従って外国語の知識は特に大切である。そしてこの外国語の知識の必要性ということに関しては、医学分野の国際語として使われている英語を自国語とするアメリカやイギリスの医学図書館員にとってよりも、わが国の医学図書館員の場合のほうが切実な問題である。

Boll¹⁾も指摘しているが、上記の3つの他に、現在の図書館に働くものには、論理学、人間関係の問題、管理技術などについての知識を持っていることが是非必要である。

この他、前述の専門図書館員に必要な3つの知識のうちの第1の図書館学の知識の中に入るものといえるが、医学図書館員に特に必要なものとして、

医学図書館員の教育

①医学図書館の管理運用を含む一般的な問題およびその解決に関する知識

②医学分野の書誌に関する知識

の2つが以前から要求されていた。従って従来の医学図書館員の教育・研修のコースには、常にこの2者又はそのどちらかが含まれていた。前者は医学図書館の運営に関して、一般図書館との相違点を強調しながら、図書館管理、目録分類、資料収集、参考業務、2次資料を中心とした医学文献の解題などの事柄に重点をおいており、後者は医学分野及びその関連分野の主要索引誌、抄録誌、その他の2次資料の解説や書誌類の紹介に重点をおいている。

図書館員がそれぞれの分野における文献およびそれについての情報を利用者に提供することを第1の目的にしている限り、医学図書館員が医学分野の書誌、索引誌、抄録誌、その他の2次資料および雑誌・単行本についての知識を必要とするのは当然のことで、この知識は医学図書館員にとっての職業上最も大切なものの1つといっても言い過ぎではないであろう。そしてその事実、医学図書館が医学情報センターとなり、情報の提供ということを行なうことを主眼とする機関に変わっていても変化しないであろう。

医学図書館の管理運営に関する一般的な知識というのは、従来の図書館学の通念から言うと、一般の図書館管理の知識で間に合うはずであるが、それに関わらず現実には特別な知識としての修得を必要とすると考えて、教育・研修にこのためのコースを準備するのが普通であるという事実は見逃されるべきではない。自然科学分野の図書館は通常医学なら医学、化学なら化学、工学なら工学といったように1つの学問分野のみを対象とする場合が多く、人文、社会科学の全分野を対象とする大学図書館の本館や、すべての知識分野を対象とする公共図書館などとはサイズが異なり、従ってその管理運営の方法がより単純であるといった程度の差ではこのように特別のコースを必要とするはずがない。もっとも規模の大小は図書館管理運営の技術的な面で必ずしも小さな問題ではない。専門図書館としての管理運営上の大きな違いは、他の大学図書館や公共図書館、学校図書館などと異り、情報サービスの提供ということが非常に大きくクローズアップされることである。それにしても、特に医学図書館の管理運営その他一般的な問題を特別に扱うコースが必要であるとしていたのは、生物医学系の図書館利用者の図書館サービスや、情報サービスを必要とする

態度に他の自然科学分野の利用者と異ったところがあるため、当然医学図書館の管理運営は他の専門図書館のそれとは異ってくるという考えに基いたものであったか、それとも、単に漠然と違いを感じてコースを作ったのかということは明白でない。

2. 最近の傾向

最近の科学技術情報分野の知識の進歩には目ざましいものがある。行動科学の導入、コンピュータの応用、システム分析などの手法の管理面での利用等々、急速に新しい分野が開拓されている。勿論この新しい動きに対して医学図書館を含む従来からの専門図書館というものが極めて積極的に反応を示して、伝統的な図書館活動の固い殻からの脱皮を計っている訳ではない。それどころか大多数の図書館というものは、外界の変化を少しは感じてはいるが、現実には、その変化に合わせてどのように図書館活動を変えていったらいいのか充分に判っておらず、また何か新しい考えを取り入れたサービスを行なってみたくとも、資金も人手も充分でなく、その上その新しいサービスに必要な知識も不足しているというのが普通である。

医学情報サービスの面を例にとってみると、現在のわが国の医学図書館は、大学医学部図書館を主体に構成されている日本医学図書館協会が長年にわたって築き上げてきた図書館間相互貸借活動のネットワークのおかげで、雑誌や単行本などといった文献そのものの提供サービスに関しては充分な活動を行なっている。例えば、慶応大学の医学情報センター1館が、他機関から申込まれる複写コピー提供の形で行なわれる相互貸借は、年間優に25,000冊を超え、又逆にこのセンターが他機関に申込む相互貸借の数も年間約8,000冊の多きに達している程であり、他にも東京大学の医学図書館や東北大学の医学図書館などのように、慶応大学の活動と匹敵する規模の相互貸借を行なっている館が幾つか存在している。このように相互貸借活動が活潑に動いている裏には、それを可能にならせるための総合目録の準備があり、又この総合目録を維持できるだけの水準を持つ目録作業についての一般的な知識の裏づけがあるわけである。

文部省は医学図書館の物理的側面の強化についての理解はかなりよく示しており、最近の国立大学系の医学図書館の建築にはなかなか素晴らしいものがある。また図書や雑誌の購入予算の面でも不十分ながらもある程度の線を維持している。しかしカレントの雑誌を6,000誌も8,000誌も持っているような医学図書館が幾

館も存在するアメリカ合衆国ですら、医師の生涯教育活動を進めてゆくのに病院図書室の類がその蔵書面や活動面で非常に遅れており、また地域内での相互貸借活動が不十分であるとして、1965年に法律を設けて、それぞれの地域内の医学・医療諸活動に対して財政的援助を与えることを目的とした Regional Medical Project を実施するに際し、この面の活動助成にも大きな援助を与えられるようにしたことと比べると、最も多くカレントの雑誌を持っている館でも3,000誌以内であるというわが国の現状は、比較的進歩している文献そのものの提供サービス面のみを見ても決して満足できる状態であるとは言えない。

ところで現在の世界の医学図書館サービスは、アメリカ合衆国の国立医学図書館 (NLM) で開発され、そのサービス網が全世界に広まり出している MEDLARS システムによる医学文献情報の検索サービスの影響などにより、コンピュータを使用しての文献探索のサービスを提供するのは当然のことと考えるほどになろうとしており、この動きにつれて、医学情報活動の中での医学図書館の意義というものが考慮されるようになってきた。すなわち、教育、研究、医療、保健衛生などの諸活動を情報という面から見たらどうなるのか、その中で医学図書館の役割は何かなどということが考えられるようになり、情報センター的な役割を志さず機関にとっては、「記録された情報」としての文献を、しかもその形態のほうからのみ取扱う従来の医学図書館サービスの殻からどのようにして抜け出して、より広い視野に立ったサービスを行なっていくかということが重大な問題となってきた。この顕著な例が、NLM の活動に関連して1968年に誕生した Lister Hill Biomedical Communication Center である。これは NLM が MEDLARS のサービス網を全世界に広げ、かつ国内にそのオンラインによるサービス網を張りめぐらすことにより、文献についての情報検索サービスを全世界的な規模で行なうと共に、全米を11の地域に分けて、地域医学図書館というものを設けて、MEDLARS の地域サービスセンターの活動と関連を持たせ、その蔵書を強化させて、それらの地域内相互貸借活動を盛んにさせ、ひいては医師の生涯教育活動を助長しようということを狙っているのに対し、通信衛星を含む電機通信網およびコンピュータその他の機器を活用して、医学、医療、保健衛生などの情報サービスのネットワークを全米に張りめぐらすことに関する研究開発を行なっている。そしてそのネットワーク

が必要な構成要素として、

- ①図書館サービス、
- ②専門別教育サービス、
- ③専門別情報サービス、
- ④聴覚及び視聴覚サービス、
- ⑤データ処理と伝達機器及び施設

の5つをあげている。また、対象とする医学情報も、研究成果の伝達、雑誌や単行本の提供、学会などでの公式および非公式の情報伝達といったような範囲にとどまらず、さらに次の9つの項目をその対象としてあげている。

すなわち、

- ①患者の健康状態についての情報伝達（カルテの情報なども含まれる）
- ②患者の健康保険などのヘルス・サービスについての情報伝達
- ③医師についての情報伝達
- ④医療施設についての情報伝達
- ⑤医療における手段や手続きや製品などについての情報伝達（医薬品情報や医療機器についての情報などが含まれる）
- ⑥医学分野の生涯教育を助ける情報伝達
- ⑦大学医学部の学部および大学院の教育を助ける情報伝達
- ⑧歯科医なども含めた臨床医を助ける情報伝達
- ⑨医学分野の研究者を助ける情報伝達

このように、文献についての情報提供から、文献に含まれた情報をも提供するサービスの範囲に含めようとするほどに視野を拡張出した図書館活動のわくを更にもう1つ越えた、文献情報以外の情報の利用、伝搬を考えたサービスのネットワークが考えられるようになってきているのがアメリカの現状である。もちろん、このような範囲の情報サービスが全て従来の医学図書館という形の機関で行なわれる訳ではないかも知れないが、医学図書館で扱う文献情報も、これらの医学情報諸活動の中での文献情報探索活動として考えてゆかなければならないのは明白な事実である。

このような現状では、医学図書館員としては、「情報サービスとは何か」、「医学・医療、保健衛生などの分野では、どんな情報サービスが求められているか」、「利用対象としての研究者、学生、臨床医、医療関係活動従事者、保健・医療分野の行政担当者等々の人達は、どのような時に、どのような情報を、どのような形で欲してい

るのか」などといった知識が必要になってくるとともに、コンピュータ、電気通信などの知識も必要であるし、また、大きな組織を有効に動かすことができるようにするための、システム分析などの知識も必要になってきている。

わが国の医学図書館は、前述のように図書や雑誌などの形の文献そのものの提供サービスという面では一応さほど見劣りのしない活動を行なっているが、情報提供サービスとなると、やっとその入口に到達したというところである。すなわち、人手を使って索引誌や抄録誌を調べて行なう文献探索サービス、すなわちマニュアル・サーチこそある程度を行なっているが（慶応義塾大学の医学情報センターから情報サービス部門を独立させてできた財団法人国際医学情報センターでは年間約700件のマニュアル・サーチを行なっている）、MEDLARSの探索サービスは日本科学技術情報センターの努力でやっと1972年の6月から一般に公開されたばかりであり、その他の情報活動となると、図書館に全く関係なく、病院のコンピュータ化であるとか、医療電子分野の研究開発であるとかいった形で断片的に行なわれているにすぎない。

また、コンピュータの図書館活動における応用も、東京大学の医学図書館における雑誌の記録などへの利用であるとか、国際医学情報センターにおける特定の専門分野での文献探索サービスへの利用、医薬品情報サービスへの利用の開発、抄録に含まれた数値などの検索への利用などといった小規模なものが見られる他は、幾つかの医学図書館での図書館活動への利用計画が存在するのみで、アメリカやイギリスなどの国々に比べて大きく遅れている。またシステム分析などの手法の図書館管理への応用は、ほとんど問題にされてもおらず、原価計算などという考え方ですら例外的な図書館でしか用いられていない。

しかしながら、組織的な情報サービスの必要性はようやく認識され出し、NIST案と併行して、厚生省の医学・医療情報のネットワーク案であるとか、通産省の医療情報のネットワーク案などといった全国的な規模の情報サービス組織を作っていく計画が着々と進められている。一方、人間ドックでの検査結果をコンピュータで処理するシステムであるとか、保健診療の請求にコンピュータを応用するシステムなど、種々のコンピュータを利用した医学・医療面での情報サービスが実用の段階に入ってきている。

このような状況下で1つ気になることは、一般の医学

図書館というものが、これらの情報活動の実際の動きや、計画の外に置かれてしまっていることであり、また、図書館員の側もこれらの動きに対して充分な関心を示しているとは思われないことである。組織的な情報サービスの必要性に対する認識が、医学分野においてもたかまってきたる時に、従来から記録された情報としての文献を取扱ってきた医学図書館員が、もしこの世の中の動きに眼をつぶっているならば、医学情報活動の主流は図書館を見捨てて、何か新しいサービス機関を作るようになり、図書館は記録情報の入れものとしての図書や雑誌を単に物理的に取扱う中央倉庫のような存在となってしまうであろう。もし医学図書館の医学情報活動における地位を従来のように中心的なものの1つとして維持しようとするならば、医学図書館員は図書館学的な知識以外に情報科学に関連したいろいろな知識をも学ばなければならない。

同様の問題が他の自然科学諸分野の図書館や情報センターなどで働く人達の場合にも当てはまる。それらの機関の職員にとっては、伝統的な図書館学の知識のみでは職場で要求される新しい型の情報サービスの提供という仕事を行なっていくことができなくなっている。この事実が、アメリカその他の国々の図書館学校のカリキュラムに影響を与え、「ドキュメンテーション」であるとか、「情報科学」であるとかいった名称のつけられた新しい科目が、従来の「目録分類」、「参考業務」などといった科目に加えられるようになった原因となった。しかし、新しい専門図書館員の必要な知識というものは、単に従来の図書館学校の科目に1つ2つの新しい科目を付け加える程度で間に合うものでないことは明白で、従って、アメリカ情報科学協会(ASIS)でも1968年にピッツバーグ大学で会議を開いて、情報学教育のカリキュラムは如何にあるべきかということを討議した。²⁾そして、

- ①情報学の各々の専門分野における専門職とは何か、
- ②どのような技術や知識が各々の専門職にとって必要であるか、

③職業の目標を追求してゆくために情報学の卒業生はどのような知識を持っていなければならないかなどの3点についての統一見解を打ち出そうとした。この会議の議長の Jack Belzer は情報学教育の目的を、学生に、

- ①情報理論、
- ②情報システム、デザイン、テスト及び評価、
- ③情報サービス

の3つの知識を習得させることであるとした。またこの同じ会議で Artandi³⁾ は、図書館員に必要な情報学の知識として、次の3つのグループの知識をあげている。すなわち、

① a. コミュニケーションに関連した作業, b. 情報の性質と作用, c. 資料組織とデータ組織の理論, d. 情報伝達のパターン, e. 索引, 抄録, 翻訳, 質問などの目的のための文書内容のコンピュータによる処理。

② a. システムの基本的理論, b. その行なう作業, c. デザイン, d. 運営, e. システムの効果および利用者の面からの評価の研究, f. 利用者の要求の分析や、行動を起す前の状態の分析, 目的の明解な定義などに導く見解。

③ a. 図書館分野におけるコンピュータの利用, b. 可能性およびその限界。

がこれである。

Hayes⁴⁾ は、現在アメリカの大学で教えられている情報学のカリキュラムに、コンピュータ・サイエンスに傾いているものと、図書館学に傾いているものと、システム論に傾いているものと、数学、論理学、言語学、コンピュータ・ソフトウェアなどに重点を置く情報学の基礎理論に傾いているものの4つのグループがあることを指摘している。

何れにしてもこの会議では、情報学の知識としては何が必要なのかということについての一致した見解は打ち出すことができなかった。

その後、Belzer たちのこのアメリカ情報科学協会⁵⁾ の教育委員会は、アメリカおよびカナダの85の学校における情報学のカリキュラムをアンケート方式で調査し、45の学校から回答を得て、242のトピックを包含した185の科目を分析して、その結果1971年に *Journal of the American Society for Information Science* に発表した。委員会の目的としたところは、どんな技術と才能が情報科学にとって基本的なものであり、かつ役に立ち、またその専門性に貢献するのかということをはっきりとすることであった。注目すべきことは、アメリカのように情報科学そのものが進歩している国でも、アンケートに回答しなかった40校のうち、37校までが情報科学に直接関係する科目を教えていない学校であり、回答した45校の中でも3科目以上を教えていたのは、わずか9校のみで残りの36校は、初歩的な「情報学の概論」の科目以外はほとんど何も教えていなかったという事実である。

しかし、中に1校だけ49の異った科目を情報科学のためにそろえていた学校の存在が報告されているのはさすがである。この調査の結果をグループ分けし、どのような科目が必要にして欠くべからざるものか、またそれぞれの科目で取扱われる主題は何か、を調べた結果、余りにも散らばりが大きすぎて、明解な結論が得られなかった。そこで Delphi 法を用いて、2度目の分析をした結果、次の9つの分析要素が決まった。すなわち、

心理学／行動科学

語学／言語学

管理

統計

図書館学

数学

情報と情報理論

コンピュータ・サイエンス／オートマタ

がこれである。

これらの分析要素に基いて、大学院修士コースで核となる科目7つが決定された。

それらは、

情報科学概論

システム理論とその応用

情報科学における数学的手法

コンピュータ・オルガニゼーションとプログラミング・システム

抄録法／索引法／目録法

研究調査法

である。

もちろん、以上の結果は、現段階でのアメリカのレベルにおける望ましい情報学のカリキュラムということの意味しているのであって、必ずしもわが国の現状に適してはいないかも知れないが、図書館が情報センターとなり、情報提供サービスが最も大切な仕事となってくると、そのサービスの質の向上を考えると、同じような条件の教育内容を正規図書館学校に望みたくなってくる。

3. 国際医学情報センターとして職員に求める知識と技術

1972年4月1日から、慶応義塾大学の医学情報センターのうち、主として情報サービス部門が独立して、厚生省および文部省所轄の財団法人国際医学情報センターとして出発した。財団法人化した理由には消極的な理由と積極的な理由の2つがあった。前者は、医学情報センターの前身の北里記念医学図書館の昔から、図書館サービ

スの活動に、情報サービスを積極的に取入れ、その費用を受益者負担としてきたため、1972年3月の時点で、職員数はパートタイマーを含めて約130名（内慶応義塾大学の正規職員20名）、年間にかかった費用は約1億5千万円（内大学予算は約5千万円）となり、大学の医学図書館としては大きくなり過ぎ、経理面でも、人事管理面でも、そのままの形で継続することが不可能になったためである。後者は、日本における医学分野の文献情報サービスの組織的な活動を作りあげるには、どうしてもある程度の核になれるような機関が必要であり、現段階では慶応義塾大学医学情報センターに匹敵する規模の医学情報サービスを行なっている機関が他に存在しないため、これを大学の図書館組織から独立させて、全国的、国際的視野に立った活動ができるようにするためである。⁶⁾

従って財団の目的とするところは、全国的、国際的な医学情報サービス活動において、主として文献情報の面で、わが国の中心的な役割を果たしていくことである。出発時の基本財産はわずかに、1,000万円、運営財産も2,000万円程度であったが、年間予算は約1億2,800万円、職員数はパートタイマーを含めて約130名という規模であった。もちろん、これは財団独立のあとに残った、規模の縮小した（予算、人件費共約6,000万円、職員数20名）慶応義塾大学の医学情報センターを別にしてである。

この財団が現在行なっている仕事は、まだ財団として初年度であるため、慶応義塾大学の医学情報センターとして行なってきたサービスをそのまま継続しているものが多く、新たに始めた仕事というのは、「職業病」などといった特殊な主題に関する図書館員向けの講義のシリーズを、センター職員のみを対象とせず一般公開したりして、教育面での活動を小規模に出発させた程度であるが、2年度からはこれら教育活動面ばかりでなく、実際の情報活動面で種々の新規の活動が予定されている。

しかしながら、ここでは現在行なっている諸活動とそれらのサービスを行なっていくのに職員が持っている必要があると思われる知識および技術についてのみ述べることにする。

財団の組織図は、まだこの財団が出発時にあるため今後が大きく変化すると思われるが、現在のところ第1図のとおりとなっている。

文献情報サービス課は、財団の文献情報サービス活動の主幹をなすもので、現在専ら、人手によるマニユア

ル・サーチに頼っているが、ハンドソートのパンチカードは以前から長い間使用されており、またタナック・カードも併用されており、最近ではコンピュータを使用してKWIC、もしくはKWOCの索引誌も作られるようになった。この課はクイック・レファレンスを中心とする参考業務の係と、個人からの依頼による主として特定主題について過去の文献を探索するretrospective searchを中心とする文献探索の係と、製薬会社、大病院、もしくは特定主題の研究グループなどを対象とする主としてカレントの関連文献をスクリーンし、これをリストしたり、索引したりして知らせる文献分析係と、国内、国外の特定の団体から申し込まれる総合的な文献情報サービスをプロジェクトとして引受けるプロジェクト係の4係から成る。さらにこのプロジェクト係は、原子力の平和利用の国際的情報サービスINISに対して、その日本における窓口である東海村の日本原子力研究所を、日本科学技術情報センター（JICST）と共に助けて、医学分野における原子力の利用に関するわが国の文献をスクリーンして、これを目録にとり、索引し、英文抄録を付けて提供する「INIS」のグループと、わが国の大気汚染関係の雑誌論文、研究報告書などの類をスクリーンして、英文抄録にしてアメリカ政府の環境庁の大気汚染情報センターに送る仕事をしている「APTIC」のグループと、JICSTが出版している「環境公害文献速報」に対して、医学文献をスクリーンしたり、地方自治体などで行った公害関係の研究の報告書の中から主要なものを抄録にして発表するサービスその他環境公害に関する種々の文献情報提供サービスを行なう環境汚染のグループと、国立癌センターから依頼されたWHOのプロジェクトの胃癌関係の文献リストの作成や、センターで出版している医学教育の文献集の作成、その他絶え間なく申込まれる大小さまざまな文献情報サービス関係のプロジェクトを行なうグループの4グループに分かれる。

「参考業務」を行なう職員にとっては非必要な知識と技術は、医学分野を中心とした関連分野およびさらに望ましくは他分野まで含めての2次資料と1次資料についての知識と、クイック・レファレンスを行なうに必要な、的確に質問をして利用者から真の要求を引き出す技術、および特定の事柄について調査して解答をまとめる技術であり、なお対象主題としての医学の一般的な知識である。その他、図書館などの所有する医学の文献資料の過半数は外国語であり、最近の外国医学文献の大多数は英語である事実から英語の知識も欠くべからざるものであ



エンスについての一般的知識、および英語以外の語学の知識とさらに普通程度のタイピングの能力などを持っていることが特に望ましい。

「INIS」のグループは、文献についての知識、スクリーニングの技術、英語の知識、索引作成及び抄録作成の技術の他に、分類・目録作業の技術と、特定主題としての放射線医学についての知識を必要とし、さらに図書館情報学、医学、コンピュータ・サイエンスなどについての一般的知識と、機械検索の知識と、普通程度のタイピングの能力を持っていることが望ましい。

「APTIC」のグループは、文献についての知識、英語、スクリーニング、ならびに抄録作成についての技術、大気汚染という主題についての知識の他に、図書館・情報学ならびに医学についての一般的な知識と、目録作成の技術、およびタイピングの一般的な能力などを持っていることが望ましい。

「環境汚染」のグループは、文献についての知識、英語、環境汚染という主題についての知識の他に、文献探索、スクリーニング、調査などの技術を持っていることが必要であり、さらに図書館・情報学、医学、コンピュータ・サイエンスなどについての一般的知識と、分類・目録作業、索引作業、抄録作業、文献展望作成、環境汚染についての参考業務、機械検索、シソーラス作成などの技術の他に、タイピングの一般的な程度の能力を持っていることが望まれる。

「その他のプロジェクト」を行なうグループは、文献についての知識、医学についての一般的知識、プロジェクトの対象主題についてのより深い知識、英語、などの他に、分類・目録、索引作成、抄録作成、文献探索、スクリーニング、調査などの技術が必要であり、さらに図書館・情報学、コンピュータ・サイエンスの一般的知識、医学その他の自然科学および社会学の研究調査法についての一般的知識、A・Vメディアについての知識、英語以外の語学についての知識、タイピングの能力などを持っていることが望ましい。

機械検索課は MEDLARS 探索サービスおよびその他のコンピュータを使用した文献情報のデータベースを使って機械検索サービスを行なうことを目的とする「検索」グループと、コンピュータを使用して、文献情報ばかりでなく、他の医学・医療情報を扱うシステムを開発することを目的とする「システム開発」のグループとに分かれる。

「検索」のグループは機械検索、文献探索、索引作成、

シソーラス作成などの技術と、医学およびコンピュータ・サイエンスの一般的知識、英語などを必要とし、さらに図書館・情報学の一般的知識、分類・目録の知識、文献についての知識、スクリーニングの技術などを持っていることが望ましい。

「システム開発」のグループは、コンピュータ・サイエンスの一般的知識、プログラミングおよびシステム開発の技術、システム理論の一般的知識、機械検索、索引作業、シソーラス作成などの技術、医学の一般的知識、および特定プロジェクトの対象主題についてのより深い知識、英語、言語学、数学などの知識を必要とし、さらに図書館・情報学の一般的知識、分類・目録、文献探索、A・Vメディアなどについての知識を持っていることが望ましい。

「MEDLARS 索引課」は、アメリカ国立医学図書館が中心となって世界中にそのサービスの網目を拡げているコンピュータを使用した医学文献の検索システム MEDLARS に対して、わが国の医学文献を索引して送っている。従って、この課で必要な知識は、索引作成技術及び医学の一般的知識と英語である。なおこれに機械検索の知識とコンピュータ・サイエンスの一般的知識とタイピングの一般的能力が加われば、さらに望ましい状態になる。

「翻訳課」では、日本語の医学論文を英語に翻訳する仕事主流で、その他に、英語その他の外国語から日本語への翻訳、および日本語のドイツ語その他への翻訳などを行なっている。従ってこの課の職員に求められる知識は、英語およびその他の外国語の知識と、医学の一般的知識ならびに翻訳する論文の主題についてのより深い知識が必要である。そしてタイピングの技術も普通以上に必要である。

「研究・開発課」はこの財団が種々の医学情報サービスを提供してゆくに当たっての技術開発面での原動力となるべき課で、その他に図書館・情報学分野の基礎的な研究を行なっていくことも目的としている。従ってこの課に配置すべき職員は、経験の豊かな、研究心の旺盛な職員でなければならない。そして、それらの職員に求められる知識と技術は次のとおりである。すなわち、図書館・情報学の一般的知識、分類・目録、索引作成、抄録作成、文献展望などの技術、文献についての知識、参考業務、文献探索、機械検索、スクリーニング、調査、シソーラス作成などの技術、医学についての一般的知識、コンピュータ・サイエンスの一般的知識、プログラミン

グの技術、システム理論についての一般的知識、英語、行動科学、図書館学およびその他の分野での研究調査技術などがこれである。なおその他にシステム管理、言語学、数学、A・V メディア、文書ファイルなどの知識と、一般的なタイピングの能力を持っていることが望ましい。

「タイピングおよび印刷」のグループは従来からプロセス・センターと呼ばれていて、国際医学情報センター内の他の課に発生する大部分のタイピングの仕事を引受けたり、外部の利用者の論文のタイピングを有料で引受けたりする、いわゆるタイピング・プールと、騰写印刷および製本修理を行なう機能とから成立っている。要求される技術は、タイピングと印刷と製本修理の3つである。そして勿論タイピストにとっては英語の知識を持っていることが望ましい。

「営業」はまだ完全に動き出していない機能で、従ってこの職員に必要な知識、技術というのは、全く推測の域を出ない。しかし常識的に言って、このグループに属する職員は、図書館・情報学と、医学の一般的知識を持っている必要があるし、さらに市場調査などの知識が必要であろう。その上コンピュータ・サイエンスの一般的な知識、英語の知識、文書ファイルの知識とタイピングの一般的能力を持っていることが望ましい。最もこのグループに要求されるのは、特定の知識より営業的センスと手腕である。

財団は図書館的な機能を主体とする慶応義塾大学の医学情報センターから独立した情報サービスを行なう機関であるが、その行なう主要な情報サービスは、記録された情報としての文献についての情報およびその中に含まれた情報の提供サービスである。そのため、その活動の情報源としては、文献の蓄積所としての図書館が必要になる。現在財団は慶応義塾大学の医学情報センター内に間借りしている形で、その図書館機能を利用して貰っている。従って財団法人国際医学情報センターの図書課は、本塾大学の医学情報センターの資料サービス部門と同じようなグループ分けをして後者との緊密な協力体制を保っている。すなわち、整理と運用の2グループに分かれ、さらに前者を収集・受入と目録・分類の2グループに、後者を貸出、相互貸借、複写、A・V (フィルム・ライブラリー) の4グループに分けている。

「収集・受入」は財団の資料収集ならびに NLM より委託されている日本の医学図書・雑誌を網羅的に収集し、その記録を維持し、現物を NLM に郵送する仕事を

行なっている。従ってこのグループに必要な知識は、図書館・情報学および医学の一般的な知識と英語であり、さらに英語以外の外国語の知識と、製本についての知識と、タイピングの一般的な能力があれば望ましいと考えられる。

「目録・分類」は財団購入図書の目録分類活動の他に、NLM の委託図書の目録・分類サービスを行なっているし、また専門知識を持っている医学図書館員を置いていない病院図書室の購入書の目録カードを作成する活動なども行なっている。従ってこのグループに必要な知識は、図書館・情報学の一般的な知識、分類・目録の知識、医学の一般的な知識および英語と英語以外の外国語 (特にドイツ語、フランス語など) の知識である。また、目録カードを作成するため、英文タイプの初歩的な能力は必要である。

「貸出」は図書館・情報学の一般的な知識と英語の知識があれば間に合う。

「相互貸借」のグループは図書館・情報学の一般的知識と、申込まれた文献の書誌的事項確認のために索引誌、抄録誌、雑誌目録、図書目録などを使用するため、これら2次資料についての知識が必要であり、その他英語の知識も相変らず必要であり、タイピングの普通程度の能力を持っていることが望ましい。

「複写」は肉体的には忙しいグループであるが、必要とする知識は、複写機器の扱いとその簡単な修理技術ぐらいのものであり、あと強いて言えば英語の知識を持っていて、複写する資料が要求どおりのものであるかどうかの確認ができれば望ましい。

A・V (フィルム・ライブラリー) は、情報伝達媒体が印刷物という従来からの形のものととらわれずに、映画・テープレコーダーのテープ、ビデオテープ、ディスク、マイクロフィルム、マイクロフィッシュと多様化している最近の動きに対応して、これら異ったメディアの医学情報も従来の図書や雑誌形態のものと同様に組織的に扱っていくことを狙ったサービスである。従ってこのグループに要求される知識は、まず図書館・情報学の一般的知識と A・V メディアに関する知識であり、さらに、分類・目録の知識、医学についての一般的な知識、コンピュータ・サイエンスに関する一般的な知識、英語などの知識を持っていることが望ましい。

以上が業務部門のサービスであるが、この他に財団の管理運営に当る事務局がある。この事務局は庶務及び人事のグループと、経理のグループと資料室との3グループ

ブに分かれている。

「庶務および人事」のグループに必要な知識は、まず財団各業務単位での活動を十分に理解して、円滑な事務活動を行なっていくために、図書館・情報学の一般的な知識をあげることができる。その他システム理論についての一般的知識とシステム管理の知識、および人事管理の知識、文書ファイルの技術などが必要であり、さらに行動科学、英語の知識、タイピングの一般的な能力などを持っていることが望ましい。

「経理」で要求されるのは経理の知識、簿記の技術などである。

「資料室」はこの財団に働く130名の職員に対して、その必要とする図書館・情報学関係の資料および情報を提供することを目的としている小さな専門図書館である。従ってこのグループに要求される知識は、図書館・情報学分野の図書館または情報センターで働く専門図書館員に求められるものと全く同じである。すなわち、図書館・情報学の一般的知識、分類・目録、文献についての知識、参考業務、文献探索、スクリーニング、調査、英語の知識、図書館学における研究調査法などがこれである。その上、索引作成、抄録作成、文献展望、機械検索、シソーラス作成などの技術に、コンピュータ・サイエンス、システム理論、医学などについての一般的知識と、A・Vメディアについての知識、文書ファイル、タイピングなどの技術を持っていれば更に望ましい。

以上が国際医学情報センターの各部門の職員に必要、または持っていることの望ましい知識と技術であり、それを纏めたものが第1表である。

必要な知識を、図書館・情報学の知識、主題の知識、コンピュータサイエンスの知識、システム理論の知識、外国語、言語学、数学、行動科学、研究調査法、その他主として事務および技術部門の知識と10のグループに分けた。前述のASISの教育に関する委員会が最終的に決定した情報学における6つの重要な分野、すなわち①図書館学、②コンピュータ・サイエンス、③数学、④行動科学、⑤、オペレーション・リサーチ、⑥言語学としているのに比べて、その図書館学の知識を、第1表では図書館・情報学としている違いが目につく。これは後者がドキュメンテーション活動を情報学としているのに対し、前者はこれを図書館学としていることによる。なお後者は、国際医学情報センターという組織体に働く人にとって必要な知識をあげているため、医学という主題の知識が非常に大切なものとしてクローズアップされている。

同様のことが外国語の知識についても言うことができる。また前者であげられている行動科学、数学、言語学などの知識というものも、第1表に出ているが、これらはどちらかと言うと、必要が感じられたのはごく最近になってからであり、現実にはこれらの知識を必要とする部門に配置された財団の職員にとってはまだ欠けている知識であるため、第1表においての扱いは通り一辺のものになっている。

第1表での図書館・情報学の知識の中の細目は、国際医学情報センターが、文献情報サービスを主とするサービス機関であるため、必然的に、ドキュメンテーションと言われる種類の知識なり技術なりが主になっている。またその他の知識および技術の中であげた細目も、必ずしも組織的でなく、特に目立った知識と技術のみをあげている。

この表を縦に見て、すぐに気がつく点は、このセンターで最も一般的に必要とされている知識が英語と、医学の一般的知識と、図書館・情報学の一般的知識であり、これに分類・目録、コンピュータ・サイエンスの一般的知識、タイピングの能力などが続いていることと、文献情報サービス課を中心として、文献探索、機械検索、索引作業などのドキュメンテーション諸活動の技術が広く、各部門で必要とされていることである。タイピングをわざわざ取上げて、必要な技術とした理由は、最近の図書館学校の卒業生でタイプライターの打てる人が少なくなったため、従来では当然と考えられこの技術を、わざわざ明記しなければならない必要を感じたためである。

この表全体について言える弱点は、必要であるとか、望ましいとか言う判断が主観的に行なわれているための不確実性であるが、その半面現実動いている仕事での必要性を述べている切実性を持っている。

II 医学図書館員のための教育活動とそれに対する要求

1. 正規教育における医学図書館員の教育

わが国における図書館学校の正規のカリキュラムの中には、アメリカにおいて見られるような医学図書館員の教育のみを目的とした科目は存在しない。最もこれに近いものとしては、1962年から1964年までの3年間にわたり、ロックフェラー財団の援助を受けて慶応義塾大学の図書館・情報学科で、毎年3ヶ月間の集中講義の形で行なわれた生物科学系図書館現職者教育であろう。ことに初年度と、第2年度は、その指導に当たった訪問教授がそ

第1表 財団法人 国際医学情報センターの各種サービスの行うに必要な知識又は技術

[illegible]

●必要な知識 ○望ましい知識

医学図書館員の教育

れぞれ Brodman 博士, Fleming 教授であって、共にアメリカでも一流の医学図書館員であったため、この間に教育を受けた全国国公立の大学の医学図書館員たちは大いに感銘を受け、そのうちの多くが現在でも活潑な活動を続けている。しかし慶応義塾大学の図書館・情報学科の通常のカリキュラム中で、医学図書館員の専門教育に直接役立つものとしては、自然科学分野の二次資料を中心とした文献に関する科目、資料論ⅡとⅥ、および大学図書館の管理と専門図書館の管理を教える情報システム管理ⅠとⅡぐらいのもので、それとても医学文献なり、医学図書館管理などが特別に取上げられている訳ではない。この点に関しては国立図書館短期大学の場合も同様である。

ところでこれをアメリカの場合と比べてみると、アメリカ図書館協会公認の大学院レベルの図書館学校で医学図書館員のための専門的な科目をそのカリキュラムに持っている学校は17校存在する。その最初の科目は、1939年に前述の Fleming 教授がニューヨークのコロンビア大学の図書館学校で教え始めた「医学分野における文献および参考業務」という科目である。この科目の内容については、当時コロンビア大学の医学図書館で Fleming 館長の下に副館長として活躍していた同じく前述の Estelle Brodman 博士が、1949年の第48回アメリカ医学図書館協会総会で紹介している。彼女が紹介したのは1947年の科目内容と1948年の科目内容であるが、この両者には既に変化が表われている。すなわち1947年のスケジュールでは、6週間にわたり、毎週月曜から金曜までの5日間教えて正味30回となっており、その内容は次のとおりである。

医学諸分野の資料に関する講義……14回(前半)

医学図書館の管理に関する講義……10回(後半)

レポートおよび試験……………6回

計 30回

資料に関する講義は、序論、医学全般(2回)、解剖学、生理学、細菌学、外科学、薬理学、神経・精神医学、医史学、皮膚科学、熱帯医学、病理学、稀書の各分野にわたり、また、管理に関する講義は、収集・受入、分類・目録、貸出、参考業務(2回)、人事、基準、図書館間協力、P.R.の各図書館活動を網羅している。

これに対して1948年のコースのスケジュールは、2月始めから5月中旬までの14週間にわたり、各週2回、合計28回の講義となっていた。興味深いのはその質的

変化である。すなわち、

医学諸分野の歴史と用語解説	8回
医学諸分野の資料解説	13回
医学図書館管理の諸問題	5回
試験とクイズ	2回
	28回

となって、管理の講義とレポートの時間を減らして、各分野の資料解説を行なう前に、その分野の歴史と用語解説を行なうことにしたことである。医学図書館活動に医師が直接参加することの少ないことと、それにも関わらず医師に対する医学文献情報の提供サービスが強く望まれる事実から、医学の主題内容を理解する助けになるコースの出現は当然のことであったと言えばそれまでであるが、何も先例の存在しない時に初めてこのような講義内容のコースがこの時代に出現したことは Brodman 博士の偉大さによるところ大なりと言っても過言ではないであろう。

歴史と用語解説は解剖学、生理学、細菌学、外科学、薬理学、神経・精神医学、皮膚科学、熱帯医学の8分野に対して行なわれて、資料の説明は1947年の時行なった諸分野から、稀書を落し、医学全般を一回に減らして、それに内科学を加えた形に直し、管理の講義内容は1947年に教えた主題から、人事、基準、P.R.の3主題をけずり、さらに参考業務を一回に縮めたものであった。

このコロンビア大学の図書館学校のこのコースは、医学図書館員のための専門コースとして初めてのものであったばかりでなく、後に他の図書館学校に出現した同様のコースの教師を作ったという点で特に意義があるものである。また、このコースが出現してから次の同様なコースが10年以上も出現しなかったことは、このコロンビア大学のコースがいかに時代を先駆けていたものであったかを如実に物語っている。

その後1950年代に、幾つかの専門コースが協会によって公認された。Vilma Procter によって1954年から教えられた南カリフォルニア大学の図書館学校のコースなどがこれであり、その他にエモリー大学、イリノイ大学などの図書館学校にも同様の科目が置かれた。

現在アメリカおよびカナダにある17の大学院図書館学校で教えられている医学図書館員教育のための専門科目を、Rees⁷⁾は3つのグループに分けている。すなわち、

①医学図書館学の概論の科目

②医学資料の科目

③医学図書館活動に関する特定の面を、より専門的に掘り下げた科目

がこれである。第1のグループに属する15の科目は、彼の調べた1967年には14の大学で教えられており、そのうち6つがアメリカ医学図書館協会が grade 1 の認定科目として公認しているものである。このグループの科目は主として、医学図書館学のすべての問題を網羅することを狙っており、重点の置かれているのは、

- ①医学資料の解題、
- ②参考業務、
- ③収集・受入、
- ④図書館管理、
- ⑤目録・分類の5項目である。

大体において図書館学校の教員を兼任している現職の医学図書館員によって教えられているのが普通で、しばしば、1学期の講義時間数では総ての項目を網羅するのがむずかしいため、科目を2つに分けて、医学資料の解題を別の科目として教えている。

第2のグループは、この医学資料の解題の科目であるが、これは同じ1967年には7つの図書館学校で教えられており、その中4つがアメリカ医学図書館協会が grade 1 認定科目である。基礎医学と臨床医学の両分野を網羅し、かつ多くは医学関連分野の資料も含めて教えている。重点を置いている主題は、

- ①基礎、臨床および関連分野の書誌、
- ②抄録、索引、翻訳、
- ③参考業務、
- ④専門用語

の4つで、この科目を教えている教員の多くは、前述のように第1のグループの科目も教えている。

第3のグループは概論にも、資料解題にも属さないタイプの科目で、医学図書館学の特定の面を明らかにすることを狙っている。1967年には2つの図書館学校でこのグループに属する科目が3つ教えられている。

ケース・ウェスタン・リザーブ大学の図書館学校の Robert Cheshier の教えている「医学における医療と研究の構造」は、学生に保健・医学分野の環境と、その環境の中で働く人達についての知識を与えることを目的としている。医学関係機関やその活動の構造というものを解説して、生物・医学分野における情報伝達の総合システムの中における医学図書館員の役割りをえがき出すことを狙った科目である。ここで取上げられている項目は、

- ②医師の役割、
 - ③医師と患者の関係、
 - ④医師と病院の関係、
 - ⑤医学における諸専門分野の説明、
 - ⑥関連分野の説明、
 - ⑦医療・保健活動におけるチーム、
 - ⑧地域医療、
 - ⑨医学と行動科学、
 - ⑩保健教育、
 - ⑪医療・保健分野の情報の流れ、
- などである。

同じケース・ウェスタン・リザーブ大学の図書館学校の George Ember は「医学における主題分析と探索」という科目を教えている。この科目の目的とするところは、主題分析と探索に関する原理と問題点、その過程などを、実際に学生に本の目録・分類作業をやらせたり、雑誌論文の索引をさせたり、レファレンスや文献探索に対する質問や要求を分析させたり、探索させたりすることにより理解させることで、目録・分類、索引作業、検索などの項目に重点を置いている。

最後の、シカゴ大学の社会学の Anderson 教授が教えている「社会機構の1つとしての医療・保健活動」という科目は、医学図書館学を専攻する学生にも開放されている科目で、アメリカ合衆国、スウェーデン、イギリス、ソ連などの各国の医療、保健システムを解明し、社会全体との関係において、医療・保健のシステムの理論を明らかにすることを狙っている。

なお Rees らは、これらの医学図書館学の正規の科目を学んだ人達の卒業後の足どりを追って、次のような興味ある事実を明らかにした。すなわち、1967年にこれら17大学の図書館学校で、医学図書館学の科目を学んだ65名中過半数の36名は卒業後医学図書館には就職せず、残りの29名だけが就職した。しかし、同じこれらの17図書館学校をこの年に卒業したけれども、医学図書館の専門課程は取らなかった学生達のうち13名が卒業と同時に医学図書館に就職した。この事実から考えると、図書館学校に医学図書館員のための専門課程を設けても、この科目を取る学生の全部が、医学図書館に就職することをはっきり決めて取っている訳ではなく、科目を学んでも、それを使わない学生も出てくるし、また、科目を取らない学生が、いざとなると気を変えて医学図書館に勤めてみたりすることが起こることは明らかである。この事実は、前述の Boll²⁾ も述べている通り、図書館学校

医学図書館員の教育

の学生は、働いた経験があって、しっかりした目的を持っている人達を除くと、過半数は卒業するまで、はっきりとどんな分野の図書館で働くかということを決めていないということを示している。

また、Rees らの調査を行った 1967 年には、25 の ALA の公認図書館学校が、医学図書館員の教育のための専門科目を持っていなかった。その理由としてあげられたことは、大部分の場合が、資格のある教員を持っていないということであったが、幾つかの学校ではカリキュラムが余りに細分化するのを嫌っていたためであった。しかし、この 1967 年には、これら専門科目を持たない 29 校の卒業生の中から 49 名もの卒業生が医学図書館に就職しており、その上そのうちの 6 名はインターン生として入っていた。この事から考えても、これらの図書館学校のうち、少なくともあと半数ぐらいの学校には医学図書館員教育のための専門科目が必要であることは明らかである。

アメリカにおける医学図書館員の教育については Hill が、大学院レベルの図書館学校における正規の教育とインターン教育と、アメリカ医学図書館協会で設定した図書館教育の規準の 3 つの問題について歴史的な発展と現在の状況を総合的にまとめて報告している。⁹⁾

彼女の報告によると、インターン教育を最初に取入れられたのは 1941 年で、当時 Tulane 大学の医学図書館長だった Mary Louise Marshall によってであった。そしてこの Marshall が、自分がアメリカ医学図書館協会の会長だった 1946 年の協会の総会で、Tulane 大学の医学図書館のこの活動が医学図書館員の正規教育の一環として必要であることを強調し、その結果、協会内に教育・訓練計画の委員会が設けられた。この委員会が作成した教育基準案が翌 1947 年に総会に提出されたが、さらによく練り直すことになり、2 年後の 1949 年に基準ができ上り、総会の承認を得るにいった。

この基準は grade 1 から 3 までの 3 段階に分かれている。すなわち、

Grade 1. 図書館学校の 2 学期目（後期）または図書館学の基礎を習得した後で、医学資料の解題、医学図書館における目録、病院図書館業務などの医学図書館員のための専門科目を習得したもの

Grade 2. Grade 1 の条件を満たした後、教育委員会で公認した医学図書館員の監督下で、6 ヶ月の間医学図書館の仕事を経験したもの

Grade 3. 大学院レベルの図書館学校で教えている医学図書館員のための専門科目を修得したものがこれである。その後この基準は、1956 年と 1964 年に改訂されている。

Marshall の次にインターン教育を始めたのは、バンデビルト大学の医学図書館長の Eileen Cunningham である。残念なことには、この 2 つのインターン教育はそれぞれ Marshall, Cunningham の引退と共に中止されてしまった。

しかし、1957 年にはアメリカ国立医学図書館 (NLM) でのインターン教育が開始され、さらに 1961 年にはアトランタ市のエモリー大学の医学図書館とロスアンジェルス市のカリフォルニア大学の生物医学図書館の両者がインターン教育を開始した。エモリー大学のはその後中止されたが、現在では 8 つの医学図書館でインターン教育が行なわれており、これら 8 つのプログラムのうち 6 つまでは正規教育の単位として数えられていない。

インターン教育の狙いは、正規の教育で得た知識、経験のある指導者の下で実際の医学図書館のすべての活動を实地に習得することにより、理論と実際を結びつけ、より一層深い理論に到達することである。従って、理想的には正規の教育を受けたあと、すぐに続いてこれを受けることが望ましいが、Rees らの調査によると、実際には大学院のレベルの図書館学校で医学図書館員のための専門科目を学んだものはインターン教育を受けず、インターン教育を受ける者は、正規の教育でこれらの専門科目を取っていない者達で、そのかわりにインターン教育を受けるといった矛盾したパターンが存在している。

インターン教育はまた、その教育を行なっている特定の図書館の考え方、仕事の処理の仕方のみが総てであるような間違った考え方を、これを受ける者に与える欠点がある。殊にこの教育を行なうには、予算的裏付けと、指導する人員の確保が必要になるため、必然的に大規模な医学図書館でなければこの教育が提供できなくなる傾向がある。これが多くのこの種の活動を失敗に終らせてしまった理由でもある。この場合教育を受ける者にとっては、実際に経験する各種の仕事が大規模な図書館の場合に限られてしまう欠点が存在する。

以上の事柄を要約すると、医学図書館員の教育には、どうしても図書館学校での一般的な図書館教育の他に医学図書館員としての専門の科目が必要である。これらの正規の教育で習っただけでは不充分であり、この習得し

た理論を、一定の資格のある指導者の下で、実地にためして、実際の知識として身につける必要がある。そこで始めて望ましい知識と技術を持った新しい医学図書館員ができ上る。しかし、この過程を可能にさせるには、まず図書館学校で必要な理論、知識というものが教育され得るようになっており、又インターン教育を行なう図書館で正しい指導が行なわれることが条件となる。

Brodman¹⁰⁾ は図書館学校の医学図書館員向けの教育の中に次の5つの内容が盛り込まれているべきであるとしている。すなわち、

- ①医学・医療・保健活動全体の中における医学図書館の位置と役割
- ②図書館活動における基本的な技術についての知識（特に医学図書館の場における）
- ③図書館・情報学の分野の最新の技術や新しい考へ方についての知識
- ④医学図書館という専門職業の伝統についての理解
- ⑤研究調査法

などがこれである。又 Rees¹¹⁾ らは、

- ①図書館学の基礎的原理と技術
- ②医学図書館の資料、設備、機能及び技術などの構造、組織、及びその管理運用
- ③生物医学分野の主題内容（専門用語の解説を含む）
- ④医療・保健活動、医学教育、医学研究などの行なわれている環境及び形態

の4つの分野の知識が教えられるべきであるとしている。

2. 図書館学の正規教育機関に対する要求

現在わが国の医学図書館協会に加盟している医学図書館の数は、大学医学部の図書館を主体とする正会員館は56館、研究機関、病院、製薬会社などに所属する医学図書館を主体とする準会員館は12館であり、前者の職員総数は780人、後者は65人となっている。しかしこれら加盟館の他に、協会にまだ加盟していないが、医学図書館員を必要とするものは、新設の医科大学の図書館であるとか、歯科大学その他の医学関連分野の教育機関の図書館、病院図書室など数多く存在する。協会は、加盟館およびその医学関係図書館で働く職員の教育・訓練のために1956年から日本薬学図書館協議会と合同で毎年3日から5日にわたる講習会を開催するようになり、1966年以降はそれぞれの協会に別れて講習会を継続してきている。そしてこれらの講習会では、医学各分野の用語の説明を中心とした解説、資料の解題、医学図書館の管理

運用上の諸問題の他に、文献探索であるとか、コンピュータの図書館業務における応用であるとか、MEDLARSについての解説であるとかいった問題が取り上げられてき、医学図書館で働く人達に必要な実際の知識であるとか、新しい技術についての理解というものを与えるのに大いに役立ってきていた。

しかしながら、これらの講習会の目的とするところは、あくまでも現職の医学図書館員達はその専門分野における進歩発展についてゆくための生涯教育の一環として行なっているもので、正規の図書館学校の教育の代りになるわけではない。

一方、医学・医療・保健衛生の分野でも、科学技術の諸分野と同様に、情報の組織的な提供サービスの必要が強く感じられるようになり、雑誌・図書などの文献の組織的な収集・蓄積・提供を本来の目的とする医学図書館も、それらの文献に含まれる情報の提供サービスを求められる気運が生じ始めた。

わが国の図書館活動にとっての最大の弱点は、大学または大学院において、網羅的な図書館教育を行なっている機関が短大を含めて2つしかなく、正規の図書館学の教育を受けている人間が少な過ぎることである。従って、この情況下で、医学図書館員のための専門科目を、わが国で唯一の4年制大学の図書館学科とその大学院を持っている慶応義塾大学の図書館・情報学科のカリキュラムに加えてもらうことを望むのは一見無理な要求のように見えるかも知れない。また、医学図書館で働くには、一般的な図書館学を学んで、その知識を医学分野で応用すればすむことであるとする従来の図書館学の伝統的な考えからすると、それだけでなく必修の科目が多過ぎて、充分に選択科目を学生に選ぶことのむずかしい現在のカリキュラムにさらに幾つかのむだな選択科目を増すことになるという反対もできるかも知れない。しかしながら、現在、医学の知識も持たず、医学分野の分類にも、医学図書館管理上の特殊な問題にも全く予備知識もない学生が、従来よりもっと積極的な文献情報サービスを行なっていかなければならない図書館に就職しても、求められる能力と、実際に学んだ知識の間に大きな開きがあり過ぎ、役に立つ働きができるようになるまでに、長い月日が必要になってしまう。しかも学生のうちの過半数は女子であり、その大半は、結婚までの短い期間のみを図書館の仕事にかけるとい実情を考えると、卒業してから医学図書館で働くことを希望している学生が医学図書館に関する専門科目を学び得るカリキュラムというも

の必要性が痛感される。まして、従来から卒業生の1/5以上が国際医学情報センターもしくはその前身の慶応義塾大学の医学情報センターに就職していることと、その他に何名もの卒業生が他の医学図書館に就職している事実を考慮に入れると、アメリカの大学院図書館学校で教えているような専門科目、すなわち、

- ①医学図書館の管理運営
- ②医学資料
- ③医学・医療・保健衛生の諸環境内での医学図書館の役割

などの科目が選択科目として設けられることが強く希望される。

その他国際情報センターの立場のみを考えた場合には、文献探索、スクリーニング、索引作成、抄録作成、文献展望の書き方、機械検索、調査活動、図書館学における研究調査法などの技術や知識を教える課目が学部課程でも選択できるような工夫がされているカリキュラムの出現が望まれる。

さらに、現在のように日本科学技術情報センターであるとか、その他幾つかの自然科学、社会科学分野に属する、文献情報を扱う機関が、時代の趨勢で、文献情報活動の枠を越え、数値データやその他の生情報の組織的な提供サービスの中に入っていかなければならなくなりだすと、その職員に期待する技術や知識も一段と高度なものとならざるを得なくなってくる。その様な理由により、情報学を主として教えてることを目的としている慶応義塾大学の図書館情報学科の大学院に対しては、前述のアメリカの情報科学協会で考えられた情報学教育のコア・カリキュラム、すなわち、

- ①情報科学概論
- ②システム理論とその応用
- ③情報科学における数学的手法
- ④コンピュータ・オルガニゼーションとプログラミング・システム
- ⑤抄録法／索引法／目録法
- ⑥研究調査法

の6つの科目の中で、未だ教えられていない「情報科学における数学的手法」の科目を加え、かつそれぞれの科目で、情報科学協会で整理し、決定したような主題を包含するようになることが望まれる。

- 1) Boll, John J. "The basis for library education" *Library quarterly*, vol. 42, Apr. 1972, p. 195-211.
- 2) Belzer, Jack ed. "Information science education: curriculum development and evaluation," *American documentation*, vol. 20, Oct. 1969, p. 327-376.
- 3) Artandi, Susan. "The relevance of information science to library-school curricula," *American Documentation*, vol. 20, Oct. 1969, p. 337-338.
- 4) Hayes, R. M. "Education in information science," *American Documentation*, vol. 20, Oct. 1969, p. 362-365.
- 5) Belzer, Jack et al. "Curricula in information science: analysis and development," *Journal of the American Society for Information Science*, vol. 22, May-June 1971, p. 193-204.
- 6) 津田良成 "医学情報ネットワークと日本図書館協会" *Library and information science*, No. 9, 1971, p. 344-359.
- 7) Rees, Alan M. et al. "Professional medical library education in the United States in relation to the qualifications of medical library manpower in Ohio," *Bulletin of the Medical Library Association*, vol. 56, Oct. 1968, p. 368-379.
- 8) Boll. *loc. cit.*
- 9) Hill, Barbarie. "The development of education for medical librarians," *Bulletin of the Medical Library Association*, vol. 60, Jan. 1972, p. 121-132.
- 10) Brodman, Estelle. "Interrelationships between academic degree programs and postdegree internship training," *Bulletin of the Medical Library Association*, vol. 56, Oct. 1968, p. 365-367.
- 11) Rees. *loc. cit.*